

## 高齢者追跡調査モデル

# 「久山町研究」学ぶ

### 弘大で講演

全国の高齢者1万人を対象とした健康追跡調査に参画する弘前大学は4日、弘前大学大学院医学研究科基礎大講堂で、調査に関連する特別講演会を開いた。同調査に携わる九州大学大学院医学研究院付属総合コホート

センターの二宮利治教授が、写真Ⅱが、糖尿病や喫煙、食生活、運動習慣と認知症との関係を説明、市民ら約80人が耳を傾けた。

九州大学は1961年から、福岡県久山町(2015年現在の人口約8400人)で、40歳以上の全住民を対象に健康状態、病気の



有無、死因を追跡調査している。健診受診率は80%、正確な死因を特定できる病理解剖実施率は75%で、町を挙げ研究に取り組んでいる。九州大の調査は、弘前などによる健康追跡調査のモデル研究となっている。二宮教授によると、同町では85年から認知症研究に

も着手。アルツハイマー型認知症を発症するリスクについて、喫煙者は非喫煙者の2倍、糖尿病の人はそうでない人の2倍という結果が出た。また運動習慣がある人や、大豆や野菜、牛乳などを多く食べる人は、認知症になる可能性が低下することが分かったという。

同教授は「将来、子どもたちが苦勞しないためにも、(対策を)今やらなければいけない」と訴えた。

(佐藤彩乃)